

自然遊学館 だより

2010 SUMMER

No.56



■2010.7.21 発行 貝塚市立自然遊学館

◆行事レポート

生きもの切り絵製作会	1
春のハイキング「水間」	1
【参加者の感想文】 春のハイキングに 参加して（江本大地）	2
二色の浜海浜植物調べ	3
5月の海で遊ぼう	4
自然を食すⅠ	6
トンボの池さらえ 2010	6
稚魚放流	8

◆生きものよみもの

ユスリカ	9
------	---

◆泉州生きもの歳時記

ムギワラムシ	11
--------	----

◆調査速報

◆調査速報 和泉葛城山昆虫調査

(2010年4月～6月)	12
--------------	----

◆館長コーナー

夏 5. 鳴き砂	14
----------	----

◆投稿

貝塚市水間周辺の貝類（児嶋 格）	16
カミツキガメ（井上海渡）	20

◆寄贈標本の紹介	20
----------	----

◆スタッフ日誌	22
---------	----

◆お知らせ	23
-------	----

表紙の写真：ムササビ。英語の flying squirrel は、「飛ぶリス」という意味。皮膜を広げて滑空する。



◆行事レポート

生きもの切り絵製作会

場所：自然遊学館多目的室

日時：2010年4月18日（日）13:30～16:00

参加者 10人

第3回生きもの切り絵展が4月3日から5月16日まで開催しました。その間に切り絵製作を企画しました。全く初めての方が5人、リピーター5人でそれぞれ好みの題材に挑戦しました。

やはり数回製作した人は全体の流れがわかっているので初心者にアドバイスしていました。何事にも言えることですが共通の課題に取り組むとき、自然に交流が生まれます。人間関係が希薄になってきたと指摘される中、このような取り組みを通じて温かい交流になればなお一層嬉しい製作会といえそうです。



参加者全員で記念撮影

今回の課題の中で「ホタル」は人気でした。時期的なものも関係して数名が取り組みました。教材開発するとき、実際のホ

タルは闇の中で光だけ見えますが、ホタルは見えません。それがなんとなくわかるように工夫しました。

(川村 甚吉)

春のハイキング「水間」

場所：貝塚市水間寺～馬場～水間公園

日時：2010年4月25日（土）10:00～15:30

参加者 30人

今年の講師は、当館の客員講師で貝類がご専門の児嶋格さんをお願いしました。雲一つない快晴の下、まずは水間寺から馬場の蓮池に向けて歩きました。数日前から気温が低い日が続き、昆虫類はきわめて少なかったのですが、植物は特定外来生物に指定されているナルトサワギクの黄色い花がやたらと目立ちます。

貝類はカワニナをはじめ次々に見つかります。大きなヤマナメクジも見つかりました。応援に来てくれた三宅壽一さんにも採集を手伝っていただきました。

遍照寺の裏道から水間公園に戻り、午前の採集物の説明と昼食の後、観音山の裏の雑木林と三ツ池で貝類などの採集をしました。ドブガイなどの大物を採集した子供はとても満足そうでした。

水間周辺の貝類については、当日に見つかったものも含め、当号別稿にて児嶋先生に紹介していただきました。以下、当日に観察された昆虫と植物の記録を紹介します。



水間公園裏の雑木林で貝を採集

(岩崎 拓・湯浅 幸子)

昆虫：クロイトトンボ属幼虫、シオカラトンボ（幼虫も）、ヒシバツタ属、オオゴキブリ幼虫、マメアブラムシ、ヒメアメンボ、アカシマサシガメ、マツモムシ、マルカメムシ、ツマキヘリカメムシ、ヒメガムシ、チビクワガタ、ナナホシテントウ（幼虫も）、ナミテントウ、ハグロケバエ、ヒメセアカケバエ、モンシロチョウ、ヒメウラナミジャノメ、アカタテハ、ルリタテハ、ホタルトビケラ属幼虫、カタアカスギナハバチ、セイヨウミツバチ

植物：きく科：オニタビラコ、ノゲシ、ナルトサワギク、セイヨウタンポポ、キツネアザミ、アキノセイタカアワダチソウ、あかね科：ヤエムグラ、おおばこ科：ツボミオオバコ、ごまのはぐさ科：オオイヌノフグリ、タチイヌノフグリ、ムラサキサギゴケ、トキワハゼ、しそ科：ヒメオドリコソウ、くまつづら科：ヒメクマツヅラ、きょうちくとう科：テイカカズラ、もくせい科：ネズミモチ、つつじ科：モチツツジ、せり科：ヤブニンジン、かたばみ科：カタバミ、ふうろそう科：アメリカフウロ、まめ科：カラスノエンドウ、カスマグサ、スズメノエンドウ、レンゲソウ、シロツメクサ、コメツブツメクサ、クズ、ばら科：オヘビイチゴ、ナワシロイチゴ、クサイチゴ、カナメモチ、あぶ

らな科：ナズナ、タネツケバナ、きんぼうげ科：ウマノアシガタ、タガラシ、なでしこ科：オランダミミナグサ、ノミノフスマ、コハコベ、たで科：スイバ、ナガバギシギシ、ギシギシ、ぶな科：アラカシ、コナラ、アベマキ、クヌギ、いぐさ科：スズメノヤリ、イグサ、やし科：シュロ、いね科：カズノコグサ、イヌムギ、スズメノテッポウ、セトガヤ、モウソウチク、とくさ科：スギナ

【参加者の感想文】 春のハイキングに参加して

ぼくは4月25日に春のハイキングに参加しました。今回は貝の先生が来ると聞いていたので張り切っていました。

水間寺を出発してすぐの川でウスイロオカチグサガイを採りました。ぼくは、川に淡水貝がいるなんて思っていませんでした。

そこから淡水貝と陸貝と生き物を探しました。そこには、カワニナやサカマキガイがいて、貝以外にも、イモリやザリガニやテントウムシがいました。

そして遍照寺から雑木林を歩いて水間公園に行きました。水間公園で日本一大きいナメクジを見つけました。ヤマナメクジです。シャウエッセンのソーセイジぐらいの大きさです。少し気持ち悪かったです。

午後から雑木林で陸貝を探しました。採ったのは、ヤマグルマとナミギセルとコンボウギセルとアツブタガイとウスイロシタラなどです。ウスイロシタラは、クチベニマイマイの赤ちゃんに似ているので間違

えました。3mm ぐらいの陸貝です。ウスイロシタラは水間で初めて見つかった陸貝だそうです。アオキという木の葉の裏に付いています。

ナミギセルとコンボウギセルの違いは大きさです。コンボウギセルの方が一回り大きいです。落ち葉をかきわけて探すので、ヘビヤムカデに気をつけました。それに落ち葉はすべりやすかったです。

ぼくは今日捕まえたコンボウギセルとヤマグルマとアツブタガイを飼っています。貝の先生に言われた通り、ぬれた新聞をして落ち葉を入れて育てています。そしてきりふきをやっています。

貝の名前や区別の仕方は、児嶋格先生に教えてもらったことを書きました。ぼくは、今まで海の貝しか興味がなかったけど今日陸貝も好きになりました。

(貝塚市立北小学校 5 年：江本 大地)

二色の浜海浜植物調べ

場所：二色の浜

日時：2010 年 5 月 8 日（土）13:30～15:00

参加者 20 人

自然遊学館に集合して、二色の浜の見出川寄りの砂浜まで歩きました。砂浜の中央部は人の出入りが多く、両端に植物が多いためです。

今回低学年の子供たちの参加にあわせ、あらかじめ海浜植物の写真を入れたレジュメを配り、砂浜で海浜植物を探してもらいました。砂浜に下りると、帰化植物のコマ

ツヨイグサの黄色い花が目立ちました。海岸にむかって歩いていくと、ピンクの花がいっぱいに広がっているハマヒルガオが見つかりました。少し先のハマヒルガオには、黄色いラーメンのようなものがいっぱい巻きついていました。アメリカネナシカズラという帰化植物で、ハマヒルガオから養分をとっています。

五郎くんが、「オカヒジキがあった」と教えてくれました。ヨットハーバー寄りには、コウボウシバ、コウボウムギが広がり、ハマボウフウの株も点在しています。ツルナは、小さい株が 1 株見つかりました。子供たちは、砂浜の略図の上に、植物を貼ったり名前を書いたりしました。

昨年、ブイ置き場のフェンスに沿ってハマゴウがありましたが、今年は撤去されなくなっていたと思っていました。が、地面に這うようにハマゴウの株が残り葉も少し出ていました。ハマゴウは浜のお香で葉をすこしちぎって香りを楽しみました。夏には薄紫のきれいな花をつけます。帰化植物も多く、アレチマツヨイグサ、コマツヨイグサ、ツキミマンテマ、シロバナシナガワハギなどを、抜きながら帰りました。



子どもたちも熱心に地図づくりをしました

海浜植物：ひるがお科ハマヒルガオ、せり科ハマボウフウ、かやつりぐさ科コウボウシバ、コウボウムギ、あかざ科オカヒジキ、ホコガタアカザ(帰)はまみずな科ツルナ、くまつづら科ハマゴウ

その他の植物：あかばな科コマツヨイグサ(帰)、アレチマツヨイグサ(帰)、なでしこ科ツキミマンテマ(帰)、まめ科シロバナシナガワハギ(帰)、コメツブウマゴヤシ(帰)、いね科ネズミホソムギ(帰)、チガヤ、ひるがお科アメリカネナシカズラ(帰)

昆虫：トノサマバッタ幼虫、オオハサミムシ、オオメカメムシ幼虫、オオスナゴミムシダマシ、モンキチョウ

(湯浅 幸子)

5月の海であそぼう

場所：二色の浜・近木川河口

日時：2010年5月15日(土) 10:00～15:00

参加者 57人

昨日までの曇り空とうって変わり、五月晴れに恵まれた中で海辺の観察会を行うことができました。講師にお魚に詳しい大阪府環境農林水産総合研究所の日下部敬之さんに来て頂きました。自然遊学館の玄関前に参加者が集合した後、ぞろぞろと徒歩で二色浜の南端まで行き、午前中の観察を始めました。

ハマヒルガオの咲き誇るお花畑を通り抜けると、砂浜の波打ち際にたどりつきます。浜風はまだ冷たさが残るものの、さっそく多くの子供達はズボンのすそをたくし上げ、たも網を片手にひざまで足を濡らして採集です。網をいれると、海中にたくさんただ



二色浜南端で生きもの採集

よっているアナアオサなどの海藻が入ってきますが、よく見るとそのなかにヒメハゼやメジナの幼魚、ヨコエビ類、ワレカラ類なども混じって入ってきます。また、砂浜横の護岸では、石積みの隙間をのぞきこむと、イシダタミガイやイボニシなどの巻貝やイソガニ、ヨモギホンヤドカリ、タテジマイソギンチャクなどを見つけることができました。



イソガニ

昼食休憩は例年、高速湾岸線の高架下の日陰でとるのですが、この日はじっとしていると寒いくらいで、砂浜にシートをひいて日光に暖まりながら過ごしました。

引き続き、近木川河口まで戻り、潮のよくひいた干潟での観察です。こちらは二色浜の均一な砂粒と違って、礫、砂、泥が混じりあった環境です。また、河口から運ばれた土砂が年々堆積し、以前はぬかるんだ泥地だったところが、運動靴で普通に歩ける締まった底質となり、干潮線（干潮時の波打ち際）はますます沖の方に移動しています（満潮線から約 100m）。

採集は、水際近くの石をひっくり返してミミズハゼやケフサイソガニを採集したり、テトラポッドについた貝などを見つけたりしていました。しばらく自由採集をした後は、おまちかねのミニ地曳網タイムです。

地曳網のしくみについてお話を聞いた後、3人で網をかついで、海に入り仕掛けました。「引っ張ってくださ〜い！」の号令とともに、参加者全員で2本のロープをゆっくりと引っ張り、網を岸までたぐり寄せました。豊漁とまではいきませんでした。2回網を入れて、魚類5種（クサフグ13匹、アナハゼ7匹、ヒメハゼ7匹、サラサカジカ3匹、スズキ幼魚1匹）と、甲殻類2種（モクズガニ12匹、テナガエビ7匹）が掛かりました。



近木川河口でミニ地曳網体験

(山田 浩二)

二色浜・近木川河口で観察した海岸動物

2010年5月15日

グループ	和名	二色浜 南端	近木川 河口
刺胞動物門	イソギンチャク目 花虫綱	タテジマイソギンチャク	○ ○
	ヒドロ虫綱	キタカミクラゲ科 カミクラゲ	○ ○
軟体動物門	ニシキウスガイ科	イシダタミガイ コシダカガンガラ	○ ○
	タマキビガイ科	アラレタマキビ タマキビ マルウズラタマキビ	○ ○ ○ ○ ○ ○
	カリバガサガイ科	シマメノウフネガイ	○ ○
	アツキガイ科	イボニシ	○ ○
	オリレイヨフバイ科	アラムシロ	○ ○
	フトコロガイ科	ムギガイ	○ ○
	有節亜綱	カラマツガイ	○ ○
二枚貝綱	フネガイ科	カリガネエガイ	○ ○
	イガイ科	ムラサキイガイ	○ ○
	イタボガキ科	マガキ	○ ○
	チドリマスオガイ科	クチバガイ	○ ○
	マルスダレガイ科	アサリ	○ ○
環形動物門	多毛綱	タマシキゴカイ(原のう)	○ ○
	カンザシゴカイ科	カンザシゴカイ類	○ ○
節足動物門	顎脚綱	イワフジツボ科	○ ○
	フジツボ科	タテジマフジツボ シロスジフジツボ アメリカフジツボ ヨーロッパフジツボ	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
	フクロムシ科	ウンモンフクロムシ	○ ○
軟甲綱	端脚目	ヒメハマトビムシ ニッポンモバヨコエビ ボシェットゲオヨコエビ ドロクダムシ類 フレカラ類	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
	ホンヤドカリ科	ユビナガホンヤドカリ ヨモギホンヤドカリ	○ ○ ○ ○
	テナガエビ科	スジエビモドキ テナガエビ	○ ○ ○ ○
	イワガニ科	モクズガニ インガニ ケフサイソガニ タカノケフサイソガニ ヒライソガニ	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
棘皮動物門	ヒトデ綱	マヒトデ科 キヒトデ	○ ○ ○ ○
脊索動物門	硬骨魚綱	カジカ科	○ ○
		サラサカジカ アナハゼ	○ ○ ○ ○
	スズキ科	スズキ(幼魚)	○ ○
	メジナ科	メジナ(幼魚)	○ ○
	タウエガジ科	ダイナンギンボ(幼魚)	○ ○
	ニシキギンボ科	ギンボ(幼魚)	○ ○
	ハゼ科	ミミズハゼ ヒメハゼ	○ ○ ○ ○
		チチブ	○ ○
	カレイ科	イシガレイ(幼魚) マコガレイ(幼魚)	○ ○ ○ ○
	フグ科	クサフグ	○ ○

※ 今回の観察会は第3回大阪湾生きもの一斉調査を兼ねたものとなりました。

自然を食すⅠ

場所：自然遊学館多目的室

日時：2010年5月30日（日）12:00～15:00

参加者 24人

「自然を食す」取り組みもかなり定着してきました。食の安全・安心が大きくとり上げられる昨今、この企画の意味は大きいものがあります。

今回は6番目の栄養素を主役してみました。3大栄養素とはいうまでもなく、糖質、タンパク質、脂肪であります。そこに、ビタミン、ミネラルが加わって5大栄養素となるわけです。今回の6番目は「栄養素」とは言えません。むしろ、栄養のないものに近いかもかもしれません。しかし、「食」を考えると重要な位置を占めるのです。

その名は「繊維質」です。これがなければ、さまざまな病気を引き起こします。人間にとって重要な素であります。

当日のメニューを紹介します。「ワラビ」の山菜炊き込みご飯、キノコ汁、おかずに「ワカタケ煮」でした。ワラビ、キノコ、ワカメ、タケノコはどれも食物繊維豊富な食品のようです。自然遊学館の施設などの関係からそれらの料理は調理したものを食べることから出発です。時間に遅れてきた人もいましたが、きちんと整列して配膳し、「いただきます」で始まりました。お代わりする人もたくさんいて、十分に用意していましたが、完食です。

食後の片づけが終わってから、食材や調理法について一通り説明しました。

次は、「トコロテン」作りです。テングサを鍋に入れ20分ほど煮詰めた後、荒熱をと

って付近で濾し、容器に入れてお持ち帰りです。その間、予め事前に用意したトコロテンを関西風に「クロミツ」で食べました。



会場の様子

自然遊学館の行事企画は貝塚市の広報、ホームページ、当館の月中行事計画などで周知を図っていますが、ほぼ、それらが出されると定員一杯になってしまいます。今回は広報初日配布日に定員に達してしまいました。参加できなかった人はお許しください。

(川村 甚吉)

トンボの池さらえ 2010

場所：貝塚市二色市民の森「トンボの池」

日時：2010年6月12日（土）10:00～15:00

参加者 53人

1997年にボランティアのべ2,000人の力を借りて完成した自然生態園「トンボの池」では、2005年まで毎冬に池さらえをして、約1ヶ月間水を抜いて池干しをしてきまし

た。その間、ヤゴなどの生きものは簡易プールに移して、水入れ時に池に戻していました。そのヤゴの数が年々減少していったので(図1)、2006年の冬には池さらえと池干しをせず、2007年の春に池さらえをして、その日のうちに水と生きものを戻す(池干しをしない)方法に変更しました(図2)。

それで今年はどうなったかという、ヤゴは5種372個体という結果になり、池さらえ当日のヤゴの個体数は3年連続して増加しました(図1)。



図2. 池さらえの様子

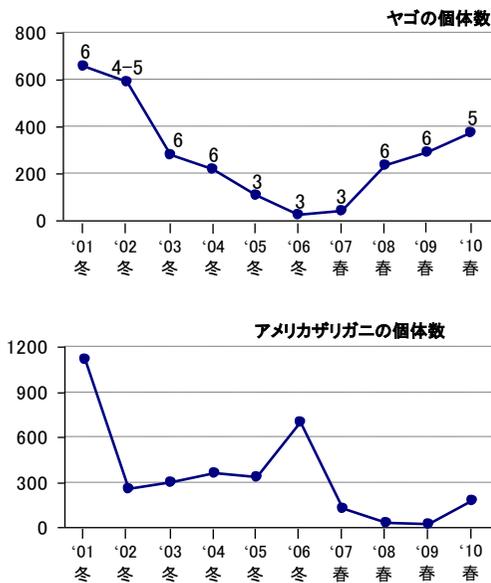


図1. 池さらえ時のヤゴとアメリカザリガニの個体数の推移(ヤゴの●印の上の数値は種数を示しています。2002年はギンヤンマとクロスジギンヤンマを区別しませんでした。)

図1からは、ヤゴの個体数が回復し、トンボの池の管理が順調にしているように見えますが、真相はそうではありません。今年の春が寒くて、池さらえ当日までの羽化殻の数が少なく、特にアオイトトンボの羽化が遅れて、結果として当日のヤゴの数が多くなりました(4月1日から6月の池干し時までの羽化殻の数は、2008年が7種868匹、2009年が7種201匹、今年は3種56匹でした)。さらに、アオイトトンボのヤゴの数だけが大幅に増え、その他のヤゴが減って、トンボ全体の多様性が減少してしまいました(以下のリストを見てください)。

自然生態園「トンボの池」池さらえ時のリスト

調査日 2010年6月12日
採集者：江本大地、森本静子、堀真治

トンボ目幼虫、ザリガニ、メダカ
に関しては、個体数を示しました。

トンボ目幼虫	5種 372個体
アオイトトンボ	342
アオモンイトトンボ属	3
マルタンヤンマ	2
シオカラトンボ	9
アカネ属	16

その他の水生昆虫

- カゲロウ目
 - フタバカゲロウ属 幼虫
- カメムシ目
 - ケシカタビロアメンボ 成虫・幼虫
 - マツモムシ 幼虫
 - マルミズムシ 成虫
- コウチュウ目
 - チビゲンゴロウ 成虫
 - コマルケシゲンゴロウ 成虫
 - ムモンチビコツブゲンゴロウ 成虫
 - ヒラタガムシの一種

その他の水生動物

アメリカザリガニ	171
メダカ	89
サカマキガイ	
ハブタエモノアラガイ	

トンボの多様性の減少（＝アオイトトンボのみ増加）は、アメリカザリガニの数が22匹（2008年）→16匹（2009年）→171匹（今年）と大幅に増加したことに関係があるのかもしれませんが。

理由①：卵越冬で春にふ化して速く発育するアオイトトンボは、幼虫越冬する他のヤゴ（イトトンボ類、ヤンマ類、シオカラトンボやショウジョウトンボ）よりアメリカザリガニとの共存期間が短くてすみます。

理由②：水草に掴まって生活することは、水底にいるアメリカザリガニとすみ場所を違えることになります。

理由③：幼虫越冬や水底にすむ他のヤゴをアメリカザリガニが捕食すると、アオイトトンボの競争相手が減ることになります。

それで、アメリカザリガニが増えたのは、

2008年から2年続けて少なく、油断して仕掛けの引き上げ回数を減らしたことが原因だと考えられます。来年の池さらえ時にはアメリカザリガニの数が減るように、仕掛けの回数を増やしたり、大きな個体も掛かるように道具を改善する必要があります。

自然遊学館わくわくクラブでは、トンボの池の池さらえと同じ週に、阪南市の2つの池と貝塚市馬場たわわの小池において、同じ方法で水生昆虫の調査を行いました。いろいろな種類の水生昆虫がどれだけたくさんいたのかを示す「豊富さ」（＝多様性×個体密度）の値は、トンボの池と比較して、阪南市の2つの池がそれぞれ、28倍と6倍、たわわの小池が8倍となりました。他の池は、周囲にも自然が残されていて、アメリカザリガニがいないか少ないという点で共通していました。「トンボの池」でトンボを増やす余地は、まだまだありそうです。

阪南市と貝塚市馬場のため池調査は、(財)国際花と緑の記念協会、積水ハウスマッチングプログラム、NPOえこゆめ基金の助成を受けて実施しました。

(自然遊学館わくわくクラブ)

稚魚放流

場所：二色の浜

日時：2010年6月13日（日）10:00～12:00

参加者 29人

二色浜での稚魚放流は、1995年から毎年恒例の行事で、今年も行われましたが、この

日は、あいにくの雨模様だったにも関わらず、参加者に来ていただいて、無事放流することができました。

今回、放流した魚は、ホシガレイといい、名前の通り、背ビレ、尻ビレに黒い斑点が星のように見えることからそう呼ばれています。昔は、大阪湾でも漁獲される魚だったのですが、近年ではまったくと言ってよいほど、獲ることが出来なくなってしまいました。このホシガレイは、大阪府栽培漁業センターで、1月26日に生まれ、132日間育成し、約80mmまで育てた1000尾を持ってきました。参加して頂いた方たちには、二色浜公園の中央マストの辺りで持参したバケツにホシガレイを入れて、波打ち際まで運んで放流していただきました。



ホシガレイ

雨という天候にもかかわらず、子供たちは何度も往復してくれたおかげで、またたく間に放流することが出来ました。放流が終わった波打ち際は、ホシガレイで埋めつくされていましたが、その日は大潮だったので、無事沖のほうへ出られたと思います。



雨の中の稚魚放流

毎年恒例の稚魚放流には、私が小さな時からずっと参加してきましたが、これまで参加者として放流する立場から、今年は稚魚を自分の手で育て、二色浜まで運んで放流することができ、大変うれしく思っています。この放流で、少しでも大阪湾でおおくの魚介類が獲れる良い海になってくれることを祈っています。

(大阪府栽培漁業センター 鈴子達也)

◆生きものよみもの

ユスリカ

ユスリカという昆虫をご存知でしょうか？簡単に言うと、『血を吸わない蚊』と聞いていただければ分りやすいと思います。初めてユスリカという名前を聞いたって方でも、おそらく一度は目にしたことはあると断言できます。例えば、夕暮れ時、頭上にたくさんの蚊のように小さい虫の大群が塊で飛んでいた・・・ということはありません。

んか？これらは大抵ユスリカ、もしくはヌカカ（ユスリカの仲間）です。また、夜の自宅の網戸、自動販売機にもたくさんとまっています。



オオユスリカ

蚊とユスリカは、壁などにとまってる様子をじっと観察すれば誰でも区別が付きます。蚊は後脚を浮かすように、そして、ユスリカは前脚を浮かすように留まっています。このことにより蚊はやや前傾姿勢に見えますが、これは、おそらく頭が下がることで血を吸いやすくなるという風に体が進化したのでしょう。一方、ユスリカは、ほぼ水平、または後傾気味です。そして、浮かせた前脚が揺れているように見えることから、脚を揺すってる蚊のようなやつ・・・ユスリカという名前になったとも言われます。また、蚊よりも飛翔速度が明らかに遅いのも見分けるポイントの一つでしょう。ユスリカは蚊と違って血を吸わないと言いましたが、血だけでなく、成虫になればユスリカのほぼすべてが何も食べないのです。そのため、せつかく成虫になっても3日間くらいしか生きていけないという、とても

はかない存在なのです。

では幼虫はどうでしょうか？水網を持って、用水路や川、または、シーズンが終わった後のプールで藻や壁際をこそげ探ってみてください。その中に赤色の小さなミミズのようなものが一緒に入ります。これがユスリカの幼虫です。この幼虫は水中の汚れの原因となる有機物を食べ、無害な無機物に分解してくれるという、なかなかの優れたものです。体が赤いというその様相から一般に『アカムシ』と呼ばれ、大きいものは釣りの餌として釣具店で、また、小さいものは熱帯魚などの餌としてペットショップなどで売られています。このように、ユスリカとは、何気に目にすることが多く、知らず知らずに身近にいる昆虫なのです。



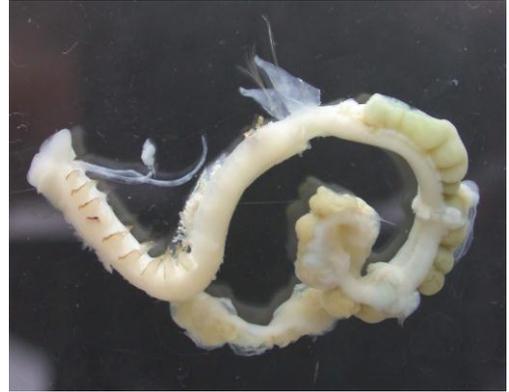
ユスリカの幼虫

都市にいるユスリカは汚れた池、湖そして、川などで繁殖し汚れを浄化してくれる、しかし、そのために爆発的な発生をすることもしばしば。その大量に発生したユスリカを不快に思う住民は多く、一般に人間に嫌われるとされる昆虫の一つでもあります。果たして、ユスリカが一方向的に悪いやつなのか？さらに、屋内に入れば、蚊と間違わ

れ、飛翔速度の遅さから簡単に叩き落されてしまうというかわいそうなやつです。

知れば知るほど情すらわいてくる昆虫のユスリカ…今後、蚊のような虫に出くわした時、それは、もしかするとユスリカではないのかな、という風に見てみてはいかがでしょうか。

(大阪府立大学大学院：山本 直)



近木川河口で採集されたムギワラムシ

◆ 泉州生きもの歳時記

ムギワラムシ

ムギワラムシって、どんなムシ?と思われの方が多いたと思いますが、昆虫の仲間ではなく、環形動物門に属するゴカイの仲間です。砂質の干潟で、潮通しの良いところに生息することが知られていますが、国内の干潟に生息する底生生物の現状をまとめたWWF JAPANサイエンスレポートでは、絶滅の恐れのある「危険」種(山西、1996)に挙げられています。

2009年5月9日、NPO法人シニア自然大学 森と海の自然科のグループらと一緒に行った近木川河口での大阪湾生き物一斉調査の際に、波打ち際に漂うムギワラムシの生体1個体が採集されました。近木川河口では初記録となりましたが、普通、ムギワラムシは砂の中に粘液を分泌して薄い膜の棲管(長さは1m近くある)を作り、その中で暮らしているので、この個体がどこに生息していたものなのか、謎が残りました。

そして、大潮の2009年6月24日、潮位が-21cmと大きく潮がひく最干潮時に合わせ、NPO法人南港ウェットランドグループの和田太一さんと定例の近木川河口の底生生物調査を行っているときでした。海に面した礫混じりの干潟のさらに沖合いに、普段は海面上に現れない砂地の場所が冠出していました。波模様(ウェイブリップル)のある綺麗な砂地を歩くと、麦わらのような砂粒をまとったストロー状の棲管の先端が、辺り一面に立っていました。まさに、これはムギワラムシに特徴的な棲管です。やはり、ムギワラムシは近木川河口に棲みかを持って生息していたのです。



ムギワラムシの棲管(砂上の高さ約1~2cm)

ムギワラムシ

学名 *Mesochaetopterus japonicus* Fujiwara

環形動物門多毛綱ツバサゴカイ目ツバサゴカイ科

ムギワラムシの標本を同定頂いた大阪市立自然史博物館の山西良平館長、5月9日の調査に協力頂いた大阪湾海岸生物研究会の花岡皆子氏、松村勲氏にお礼申し上げます。

(山田 浩二)

ところが肝心の昆虫はというと、さっぱりで、セアカツノカメムシやコマルハナバチなど成虫で冬を越した種を含めて10種程度しか確認できませんでした。写真はシリアゲムシのオス成虫で(図2)、「北隆館の昆虫図鑑Ⅲ」ではキリシマシリアゲ *Panorpa kirisimaensis* Issiki とされているものに該当します。



図2. キリシマシリアゲ

◆調査速報

和泉葛城山昆虫調査

(2010年4月～6月)

4月17日、和泉葛城山昆虫調査

数日前から気温が下がり、当日も山頂に行くとき空気が冷たく、とても4月中旬とは思えません。それでも春だと感じられるのは、コブシ、シハイスミレ、コバノミツバツツジなどの花が咲いているからです。ブナの花芽も樹冠ではけっこう目立っていました(図1)。



図1. ブナの花芽

5月13日、和泉葛城山植物調査

上久保文貴先生、湯浅幸子さんの植物班に同行しました。登山道Bコースから登り、Aコースを降りるルートです。近木川からはカジカガエルの鳴き声が聞こえ、登山道ではタゴガエルが多数鳴いていました。昆虫ではBコースの標高540m付近でハルゼミが1匹だけ鳴いていました。

Bコースでは、チゴユリ、ハナイカダ、アオダモなどの花を撮影し、帰りのAコースではニリンソウやヒメレンゲの花を撮影することが出来ました。図3はBコースで生えていたキクラゲです。漢字で「木耳」と書くのは感じが出ていますね。館に持ち帰って乾燥させると黒くなりました。キノコではアカマツの幹に生えていたヒトクチ

タケを採集し、袋状になった部分から、オオヒラタケシキスイ、カブトゴミムシダマシ、ヒラタキノコゴミムシダマシなどの菌食性の甲虫が出てきました。



図3. キクラゲ

5月18日、和泉葛城山昆虫調査

幾分風は冷たいものの、先月よりははるかに昆虫が増えました。特に甲虫の仲間を多く確認できました。図4は葛城神社の石段下にいたニワハンミョウです。ハンミョウの仲間は捕食者で、tiger beetle というだけあって精悍な顔つきをしています。



図4. ニワハンミョウ

他に多かったのはマダニ類で、服に付いたり捕虫網に付いたりして難儀しました。い

ろいろな動物と暮らしているということで我慢することにします。山頂付近では、ムカシトンボのメス成虫の写真を撮ることができました(図5)。この種の幼虫期間は7~8年で、川近くの陸に上がって羽化することが知られています。そこから山頂に飛んで来たのか、吹き上げられたのでしょうか。



図5. ムカシトンボ

その他、自然遊学館に標本を所蔵していない種として、ヒメツヤツチカメムシ、ヒメツノカメムシ、ヒシカミキリ、マツアナアキゾウムシ、ヒゲブトクチブトゾウムシなどを採集しました。

6月17日、和泉葛城山昆虫調査

5月に比べて更に虫の数が増えましたが、写真はというと、これといった出来のものは撮影できませんでした。ハルゼミの鳴き声がちらほら聞こえます。チョウで数多かったのはテングチョウで、3時間ほどで50個体以上観察しました。

以前、本誌で貝塚市のカメムシ目を紹介した時に書いたテングオオヨコバイ(図6)や、ダイミョウセセリの写真は、これまで以上の出来のものが撮影できました。ルリ

オトシブミやエゴツルクビオトシブミなど、この仲間が揺籃から羽化する時期を迎えたようです。



図 6. テングオオヨコバイ

調査ルートの最後の方でムネアカオオアリの羽アリが巣から次々と飛び出していく所を見ることが出来ました。4月と5月には働きアリをよく見ていたのに今回は見ないな(クロオオアリの働きアリはいるのに)と思いながら調査していたので、羽アリが飛び立つ時期なのだと納得しました。その他、自然遊学館に標本を所蔵していない種として、アリノスアブを採集しました。

(岩崎 拓)

◆館長コーナー

夏5. 鳴き砂

今年の夏季特別展に私が訪ねた「関西鉦山跡等探検」を展示してくれることになりました。その展示のひとつに「鳴き砂」を加えることにしました。以前小学校に勤務していましたが、私の夏休みの課題として「砂集め」をしたことがあります。琴引浜の砂を軸に他の所の砂を集め比べてみたことがありました。

きれいに洗い、乾燥させて空瓶に保存していたのですが、長い年月のうちに散乱し、琴引浜と二色の浜の砂がわずかに残っていました。はやる心を抑えて琴引浜のほうに棒を突き刺してみますと、「きゅきゅ」と高い大きな音がしました。二色の浜は「ぐうぐう」と低い小さな音です。

鳴き砂とは言うまでもなく砂の上を歩けば「きゅきゅ」という音が響く砂のことです。琴引浜はその代名詞とっていいほどの砂浜です。以前琴引浜を訪ねた時は「本日は砂はなきません」という看板が立っていました。そこで、急に本日(6月29日)思い立ち琴引浜に向かったのです。「急に思い立ち」と表現したのはその通りなのですが、実は高速道路無料社会体験期間に入った(2日目)からです。以前から無料になれば是非行ってみようと思っていましたから、心の底では若干の準備があったのでしょう。

阪和自動車道、中国自動車道、舞鶴若狭自動車道、京都縦貫自動車道を乗り継ぎ小雨の琴引浜に10時前に到着しました。かな

り広い砂浜ですが、4、5人の家族がいる程度でした。海開き直前なの입니다。



琴引浜 ①

水分の少ないところ、多いところ、排水が流れている付近、砂浜の中心などいろいろ実験しましたがやはり砂は鳴きません。適度の乾燥が必要だと思います。と言いますのも、乾燥させた砂をビンに入れ棒を突き刺しますと砂は先述の通り高い大きな音を出すからです。



琴引浜 ②

さて、その鳴く砂と鳴かない砂との違いはどこにあるのでしょうか。琴引浜の砂は

ルーペで見ますと、透明や半透明の石英が中心であることがわかります。また、粒の大きさもほぼ同じものが多いこともわかってきます。二色の浜や他の所の砂は石英が少なくいろいろな石が混じり、粒の大きさが整っていないことに気づきます。



琴引浜 ③

ともあれ、十数年前この琴引浜に行ったのは全く「急に思い立ち」でした。家を出るときまで高野山から龍神温泉に行く計画を心の中で立てていました。しかし、実際には車は泉南インター入り口をくぐっていました。実に「突然、急に思い立ち」でした。そして、偶然にも今回捜し求めた昼食の店は以前と同じ店でした。

(川村 甚吉)

◆投稿

貝塚市水間周辺の貝類

1. 梶谷川、蓮池周辺の貝類

2010年4月25日、貝塚市立自然遊学館の春の行事で、水間から馬場にかけてハイキングをかねた自然観察会が行われた。水間周辺には雑木林や竹林、田畑が残されていて、様々な生き物の観察に適した環境がある。今回は里山に生息する貝の仲間を探索し記録することにした。

水間から人家の建ち並ぶ梶谷川沿いをしばらく行くと、橋の架かる川岸のコンクリート壁面を排水が流れ落ちるところがあり、周囲にウスイロオカチグサガイ（大阪府絶滅危惧Ⅱ類）がたくさん生息しているところを以前に見つけていた。前回の調査から7年たっているのに、どうかと思ったがやはり生息していた。当時、馬場地区では土地改良整備が行われていて、梶谷川から右手に行く蓮池までの丘陵地全体が掘り起こされていて工事中であった。蓮池も水が抜かれていて池底に大形のドブガイがたくさん立っているのを見つけ、泥に足を取られながら苦労して採集した。その後どうなったか気がかりであった。現在はそのあたりは整地されて、ひな壇状の田畑になり、野道に沿って細い農業用水路が付けられている。水路を覗いて行くと会所の中からヒメタニシ、スクミリンゴガイ（南米からの移入種）、カワニナ、ヒメモノアラガイ、サカマキガイ（ヨーロッパからの移入種）などの淡水貝が見つかった。また会所の壁面の水際に

は、ナガオカモノアラガイ（大阪府絶滅危惧Ⅱ類）やノハラナメクジ（ヨーロッパからの移入種）が着生していた。畑に置かれたワラの下にはチャコウラナメクジ（ヨーロッパからの移入種）やウスカワマイマイが生息していた。以前にマシジミのいた蓮池につながる小川は、砂のない三面張りの水路に変わり、マシジミがいなくなった代わりに小型種のコシタカヒメモノアラガイが水面から出て壁面に着いていた。三面張りの水路が、着生生活する種の分布範囲を広げ、新たに作り換えられた環境にも順応して生息している。淡水貝は池や川、田畑をつなぐ水路などに種ごとに住み分け分布し、水でつながる環境の中で生息するため、環境が一部壊されてその場所ではいったん絶滅しても、再度水路がつながることで多くの種類の貝が流れによって運ばれてきて再生は容易に行われる。蓮池は満水状態でドブガイは確認できなかったが、隣接した池からオオタニシが観察会の参加者によって見つけられた。好天に恵まれた春の野原で子供達と一緒に9科12種類の貝類を観察する事ができた（表1）。

表1. 梶谷川、蓮池周辺の貝類
2010. 4. 25

淡水貝	
タニシ科	ヒメタニシ
	オオタニシ
リンゴガイ科	スクミリンゴガイ
カワニナ科	カワニナ
モノアラガイ科	ヒメモノアラガイ
	コシタカヒメモノアラガイ
サカマキガイ科	サカマキガイ
陸生貝	
オカモノアラガイ科	ナガオカモノアラガイ
オナジマイマイ科	ウスカワマイマイ
カワザンショウガイ科	ウスイロオカチグサガイ
コウラナメクジ科	ノハラナメクジ
	チャコウラナメクジ

2. 水間公園周辺の貝類

水間観音の横にある水間公園周辺の森は陸生貝の産地として有名である。しかしここ暫くの間に公園内が整備され、敷地が広くなり、遊歩道が付けられ周辺の樹林は明るく様変わりした。公園の裏山から馬場地区にある遍照寺にいたる道筋には、竹林や照葉樹林、杉林などの中を行く山道がつけられていて、起伏の多い樹林内には落葉の厚く堆積する場所があり、陸生貝の生息に適した環境が残されている。また東側の山裾には根谷川が流れていて、常に湿度の保たれた環境が森全体に作りだされている。

前回の調査は1998年6月に水間観音と公園のあいだの斜面地にある御堂や階段周り、樹林内の範囲で行い、21種類の陸生貝を記録している(表2)。

今回の調査は自然遊学館の春の行事を契機にして4月19日～5月2日までの5日間、未調査の公園周辺まで範囲を広げて行うことにした。今春は天候が不順で何時までも寒く、大型種のカタツムリの活動がまだ活発でなく、雨後でも木に登っている姿や石垣上をはっている姿が見かけられなかったが唯一、樹のほこらに着生する**クチベニマイ**が見つかった。また堆積した落ち葉の中や小灌木の葉上から貴重な小型種を発見することができた。

公園内には**ヤマクルマガイ**や**アツブタガイ**が多く、裏山から遍照寺へかけての範囲にまで広く分布するが、局所的であり、特に**ヤマクルマガイ**は比較的乾燥した場所にある落ち葉の中からも見つかった。前回の調査では未発見の**ヤマキサゴ**も前二種と同

様な分布状況であるが生息数が少なく、傾斜地で落ち葉の堆積の少ない、日当たりがあり、背の低いネザサなどが生える砂礫地の湿った場所に単体で生息している。

照葉樹林の倒木は保水性があり乾期でも水分が残り、陸生貝の生息場所として適している。森全体が良く片づけられていて倒木は少なかったが、一本の倒木裏から**ナミコギセル**、**ナミギセル**、**ウスベニギセル**、**クチマガリマイマイ**が見つかった。他の場所でも**ナミコギセル**は照葉樹のほこらに数個体集まっているのが見つかり、**ナミギセル**、**ウスベニギセル**も生息数は多くはないが、落ち葉の堆積中からも見つかった。

東斜面の山腹が削られて付けられた道路のコンクリートブロック壁面、高さ1m、幅30cmの上部と傾斜地の間に沿って落ち葉の堆積した場所が、登り勾配で20m位続いているところがあった。この間に**ヤマキサゴ**、**ヤマタニシ**、**イノウエヤマトガイ**(大阪府絶滅危惧Ⅱ類)、**アツブタガイ**、**ヤマクルマガイ**、**ミヤコムシオイガイ**、**タワラガイ**、**ナミヒメベッコウガイ**が生息していた。**ヤマタニシ**は分解の進んだ腐植土の間に集まって生息し、**イノウエヤマトガイ**、**タワラガイ**は厚く堆積した落ち葉の下の腐植土上から、**ミヤコムシオイガイ**は薄く堆積した落ち葉下の砂礫の間で見つかった。**ナミヒメベッコウガイ**は落ち葉に埋まっている、朽ちかけた小枝上に着生していた。この場所には陸生貝の生息に非常に適した環境が残されていて、これらの種はコンクリート壁の作り出す湿潤な環境の下で、落ち葉が堆積する局所的な空間に微妙に住み分けていることがうかがえる。また**イノウエヤマ**

トガイは紀伊半島と大阪府南部に分布し、牛滝山が北限とされていて、水間では初記録種である。1961年に新種記載され、模式産地が大阪府泉南郡下荘村[現在は阪南市]と記載されている。ヤマキサゴ、アツブタガイ、ミヤコムシオイは石灰質のフタをもち、ヤマタニシ、イノウエヤマトガイ、ヤマクルマガイは角質のフタで、どちらも休眠時には殻口を隙間なく閉じることができ、外敵や乾燥から身を守っている。これらの種は海に住む前鰓類の仲間に変化したエラで呼吸をし、地面上で生活する。フタのないクチベニマイマイやキセルガイなど有肺類の仲間は肺呼吸で、休眠時には殻口に呼吸用の小さな穴を残して全面に膜を張って乾燥から身を守り、湿度の高い夜間や雨後に活動して樹に登る種が多い。ナメクジも有肺類に属し公園の植え込みの下からヤマナメクジが見つかり、公園入り口の御堂裏で、チャイロオトメマイマイとコベソマイマイの幼貝が見つかった。

公園の西側に以前料亭であった所が廃屋で残る場所があり、隣接して池もある。この周辺の斜面地にもヤマキサゴ、アツブタガイ、ヤマクルマガイ、ミヤコムシオイガイ、コンボウギセル、ナミギセルガイ、オオケマイマイなどが分布している。ここではアオキの葉裏に着生する二種類の微小種が見つかり、一種はクチベニマイマイの幼貝、もう一種はウスイロシタラガイ（大阪府絶滅危惧Ⅱ類）であった。ウスイロシタラガイは水間が模式産地の貝で1902年米国人貝類学者ピルスブリーによって新種記載された。貝塚市にとっては貴重な種である。日中に蒸散した池の水が夜間に結露し、

森を湿潤にする。低灌木の葉上にできた夜露や雨後のつゆを求めて木に登る小型種も多くいる。移動能力が乏しく、乾燥に弱い陸生貝は水環境をたよりに局所的に生息し、分布する生物である。また池の中にはドブガイとヒメタニシが生息していた。

今回の調査で10科19種の生息が確認できた(表2)。前回と合わせると11科26種類になる。歴史ある寺院と共に、これらの貴重な貝類の住める環境が水間公園周辺にあることを知って頂き、今後もこの場所の自然が守られて残されて行くことを願って止まない。

表2. 水間公園周辺の貝類

		1998年	2010年
ヤマキサゴ科	ヤマキサゴ		○
ヤマタニシ科	ヤマタニシ		○
	イノウエヤマトガイ		○
	アツブタガイ	○	○
ヤマクルマガイ科	ヤマクルマガイ	○	○
ムシオイガイ科	ミヤコムシオイガイ		○
キセルガイ科	ナミコギセル	○	○
	コンボウギセル	○	○
	ナミギセル	○	○
	ウスベニギセル	○	○
	ホソヒメギセル	○	
オカクチキレガイ科	オカチヨウジガイ	○	●
タワラガイ科	タワラガイ	○	○
ベッコウマイマイ科	ウスイロシタラガイ		○
	カサキビガイ	○	
	ウラジロベッコウガイ	○	
	ナミヒメベッコウガイ	○	○
ニッポンマイマイ科	ケハダピロウドマイマイ	○	●
	コベソマイマイ	○	○
オナジマイマイ科	クチマカリマイマイ	○	○
	オオケマイマイ	○	○
	クチベニマイマイ	○	○
	ギュリックマイマイ	○	
	オトメマイマイ	○	
	チャイロオトメマイマイ	○	○
ナメクジ科	ヤマナメクジ	○	○

●は死殻

※ 1998年の調査日は6月10～25日にかけて
2010年の調査日は4月19日～5月2日にかけて

調査に協力して下さった貝塚市立自然遊学館学芸員山田浩二氏、岩崎拓氏、ウスイロシタラガイを見つけて下さった湯浅幸子氏、オオタニシとヤマナメクジの発見者、三宅壽一氏に感謝とお礼を申し上げます。



ヤマキサゴ



コンボウキセル



ヤマククルマガイ

ヤマタニシ

アツブタガイ



ナミギセル



イノウエヤマトガイ



ウスベニギセル



ミヤコムシオイガイ



タワラガイ



ナミコギセル



ウスイロンタラガイ

(日本貝類学会会員 児嶋 格)

近木川でカミツキガメ発見

2010年5月5日。近木川河口近くの臨海線の高架下に魚をつかまえに行こうと思って岸から川を見たら、これまでに見たことがないカメがいた。最初、スッポンかと思って近くに行くと、しっぽが長く、毛が生え、とげがあった。意外と泳ぐのがはやかった。網ですくって陸に上げたとき、網をやぶられた。低い声で「シャー」とうなり、するどい爪があっつかまれそうでこわかった。あぶない動物だと思い、どうにか自然遊学館に持っていった。特定外来生物のカミツキガメだと分り、すぐに標本にされた。



データ：全長 59cm、甲幅 22cm、甲長 27cm

(貝塚市立西小学校 6年：井上 海渡)

◆寄贈標本の紹介

以下の方々より標本を寄贈していただきました。お礼申し上げます。

(※2010年6月分まで)

<哺乳類>

- ◆奥田大介さんより
イタチの一種 死体 1点
貝塚市橋本 2010年6月20日採集

<鳥類>

- ◆江本玲子さんより
マヒワ 死体 1点
貝塚市中 2010年4月20日採集

<爬虫類>

- ◆平田幸子さんより
アオウミガメ 剥製 1点
(昔に購入した品)
2010年4月26日寄贈
- ◆川端隼平・有光寿音さんより
ミシシッピーアカミミガメ 卵 1点
貝塚市福田 2010年5月21日採集

<両生類>

- ◆三宅壽一さんより
カスミサンショウウオ 幼体 2個体
泉州地域 2010年4月21日採集
- ◆樽本初苗さんより
ニホンアマガエル 1点
貝塚市千石荘 2010年5月2日採集

<魚類>

- ◆三宅壽一さんより

スミウキゴリ 生体 1点
泉州地域 2009年12月1日採集

- ◆渡辺久和さんより
ギンポ 生体 1点
貝塚市二色の浜 2010年4月18日採集

<頭索動物>

- ◆花野晃一さんより
ナメクジウオ 生体 4個体
淡路島由良 2010年4月3日採集

<軟体動物>

- ◆児嶋 格さんより
イノウエヤマトガイ 1点
貝塚市水間公園 2010年4月19日採集
ミヤコムシオイガイ 1点
貝塚市水間公園 2010年4月19日採集
- ◆三宅壽一さんより
ドブシジミ 生体 4点
泉州地域 2010年4月21日採集
- ◆小川武士さんより
シジミ科の一種 生体 2点
近木川河口 2010年6月7日採集

<甲殻類>

- ◆花野晃一さんより
ヒメメナガオサガニ 生体 2点
淡路島由良 2010年4月3日採集
- ◆渡辺久和さんより
オオシロピンノ ♂1点
貝塚市二色の浜 2010年4月18日採集
- ◆覚野信行さんより
タカノケフサイソガニ ♂20、♀10点
岸和田市春木川河口 2010年5月29日採集

<棘皮動物>

- ◆秋丸涼太郎さんより
キヒトデ 生体 1点
貝塚市二色の浜 2010年6月6日採集

<扁形動物>

- ◆秋丸涼太郎さんより
ミノヒラムシ 生体 1点
貝塚市二色の浜 2010年6月6日採集

<昆虫>

- ◆坂口蔵之介さんより
メスアカケバエ 成虫 4点
スギドクガ 幼虫 6点
貝塚市北町 2010年4月13日採集
- ◆原野湧生さんより
チビクワガタ 成虫 1点
貝塚市水間公園 2010年4月25日採集
- ◆児嶋格さんより
アカシマサシガメ 成虫 1点
貝塚市水間公園 2010年4月25日採集
- ◆五藤武史さんより
フジハムシ 成虫 1点
貝塚市柵谷 2010年4月30日採集
アカガネサルハムシ 成虫 1点
ヒゲボソゾウムシ属の一種 成虫 2点
貝塚市蕎原 2010年5月3日採集
スグリゾウムシ 成虫 1点
高石市高師浜 2010年5月4日採集
ヨツボシテントウ 成虫 1点
貝塚市馬場 2010年5月15日採集
ヒゲナガオトシブミ 成虫 4点
貝塚市蕎原産 2010年5月11日羽化
アカガネサルハムシ 成虫 3点
貝塚市蕎原 2010年5月15日採集

イタヤハマキチョッキリ 成虫 3点
和泉葛城山 2010年5月21日採集
ルリハムシ 成虫 2点
和泉葛城山 2010年6月9日採集
ヒゲナガオトシブミ 成虫 6点
貝塚市蕎原産 2010年6月6日羽化
ヒゲナガオトシブミ 成虫 6点
貝塚市蕎原産 2010年6月7日羽化
オトシブミ 成虫 1点
和泉葛城山 2010年6月9日採集
エゴツルクビオトシブミ 成虫 1点
和泉葛城山 2010年6月16日採集
ヤクシマルリシジミ 成虫 1点
和泉葛城山 2010年6月17日採集
エゴツルクビオトシブミ 成虫 6点
和泉葛城山産 2010年6月19日羽化
ゴマダラオトシブミ 成虫 1点
和泉葛城山産 2010年6月19日羽化
カメノコテントウ 成虫 1点
和泉葛城山 2010年6月22日採集

◆西澤昴竜さんより

オオハサミムシ 成虫 1点
オオスナゴミムシダマシ 成虫多数
二色の浜 2010年5月8日採集

◆佐々木仁さんより

フタモンウバタマコメツキ 成虫 1点
貝塚市千石荘 2010年6月5日採集

◆宮本拓海さんより

ショウリョウバッタ 幼虫多数
貝塚市二色 2010年6月23日採集

◆濱塚海也さんより

ショウリョウバッタ 幼虫多数
貝塚市二色 2010年6月23日採集

＜写真＞

◆五藤武史さんより

ツマキチョウ 1点
貝塚市畠中 2010年4月3日撮影

◆石井葉子さんより

ノウサギ 2点
貝塚市千石荘 2010年4月25日撮影

◆食野俊男さんより

キビタキ 1点
貝塚市千石荘 2010年5月2日撮影

ハマシギ 1点

近木川河口 2010年5月13日撮影
カルガモ 2点

近木川下流 2010年6月4日撮影
ミサゴの営巣 3点

貝塚市木積 2010年6月5日撮影
カイツブリ 1点

貝塚市鳥羽 2010年6月16日撮影
コアジサシ 1点

近木川河口 2010年6月17日撮影

◆スタッフ日誌

4月11日、玄関ホールで展示している大阪湾の魚水槽（今は、グレ、チヌ、クロホシマンジュウダイ、イシダイ、アイゴなどを飼っています）の海水を二色ヨットハーバーの海岸に汲みに行きました。いつもヨットハーバー事務所の方にはご配慮頂きありがとうございます。今回は約180リットルの海水を汲んで帰りました。夏は海水の汚れが速いのですが、これでだいたい3ヶ月はもちます。（鈴）

5月5日、投稿にあったカミツキガメが持ち込まれた日です。カミツキガメは特定外来生物に指定されていて、飼育が禁止されているため標本にしました。外来生物法では、その場で放すキャッチ&リリースが認められていますが、人間に危害を加える可能性がある動物を放すのは問題があります。特定外来生物に指定されているのは、ほかにヌートリア、アライグマ、ウシガエル、カダヤシ、ブルーギル、オオクチバス、セアカゴケグモ、ナルトサワギク、アレチウリなどです。故意に移動・譲渡・飼育・放逐すれば罰則があります。ミシシッピーアカミミガメ、グッピー、タイリクバラタナゴ、アメリカザリガニ、スクミリンゴガイ(=ジャンボタニシ)、ムラサキイガイ、セイタカアワダチソウ、キショウブ、コマツヨイグサなどは、要注意外来生物に指定されていて、上記の行為に対して罰則はありませんが、不必要に分布を広げないように注意してください。(岩)

6月25日、来年度の小学理科教科書の見本が教育出版から送られてきました。ページをめくると、なんと自然遊学館の写真が載っています！2ページにわたる「わたしの研究」というコーナーで、自由研究の際には、地域の科学館を利用しようという内容の中で紹介されているものです。かつて教科書の副読本には当館の活動が紹介されたことはありましたが、教科書本文の中に登場するのは初めてです。(浩)

◆お知らせ

夏期特別展「関西鉱山等探検」

場所：自然遊学館多目的室

期間：7月17日(土)～8月30日(月)

身近なところからも鉱物が採集できます。自分で見つけたものは何ものにも代えがたい宝物です。特に、「光物」と出会うとうれしくなってしまいます。関西を中心に探検した様子を展示します。

夏休み自由研究相談

場所：自然遊学館多目的室

期間：7月23日(金)～8月27日(金)

昆虫、海や川の生きもの、植物などの調べ方や名前調べなど、分からないことがあれば、事前に電話でお申し込みください。

* 自然遊学館だよりのバックナンバーは、下記のホームページよりご覧いただけます。

自然遊学館だより 2010 夏号 (No. 56)

貝塚市立自然遊学館

〒597-0091

大阪府貝塚市二色3丁目26-1

Tel. 072 (431) 8457

Fax. 072 (431) 8458

E-mail: shizen@city.kaizuka.lg.jp

<http://www.city.kaizuka.lg.jp/shizen/>

発行日 2010.7.21

この小冊子は市内印刷で作成しています。